

私の体育教師論

<目指した体育教師像>

松下邦雄

はじめに

- 1、体育科教師を志した動機 (1)
 - ①大学進学
 - ②仙台大学体育学部体育学科に入学
 - ③徳性・能力・個性
 - ④教え子の記憶に残る教師を目指す

- 2、体育教師の実態と課題 (3)
 - ①校務における位置
 - ・生徒指導に拘ることなかれ
 - ②求められる使命とは
 - ・教師としての基礎基本を認識する
 - ・知性の高揚 (1) 読書の意義を認識する
 - ・知性の高揚 (2) 事務能力 (文章作成・表現能力)
 - ③体育教師に求められる課題
 - ・単純且つ浅はかな指導の改善
 - ・ボキャブラリー (語彙)、説論が可能な教師の力量
 - ・体育人としての特性を活かす人間力

- 3、学校運営に果たす役割 (4)
 - ①学校秩序の確立
 - ・規律指導の先頭に立つ資質
 - ②学校の活性化に貢献する
 - ・各種行事への積極的取組み
 - ・部活動の意義

- 4、体育教師の責務 (5)
 - ①授業の重視
 - ・体育実技、授業内容の創意・工夫
 - ・保健
 - ・始終業での規律指導 (挨拶礼儀)

- 5、体育教師の心得 (7)
 - ①品格ある体育教師
 - ・品性
 - ・知性 (教養)
 - ・服装
 - ②人間味に富む体育教師の強み
 - ・道徳観に富む
 - ・強い責任感と使命感

- 終わりに (8)
 - ・求められる体育教師像
 - ・体育教師を志す後輩への期待

私の体育教師論

<目指した体育教師像>

松下邦雄

はじめに

学校法人朴澤学園仙台大学第1期生として卒業、晴れて高校の体育教師として赴任したのは昭和46年であった。縁に恵まれた赴任先は、岐阜県瑞浪市の学校法人安達学園中京商業高等学校である。名古屋の梅村学園中京高等学校（現中京大学附属中京高等学校）の兄弟校に当たる。赴任の4年前に創立時の校名中京高等学校から中京商業高等学校（令和2年から再び創立時の校名に）となった男女共学の総合高校である。

新任教師として赴任した当時は、1年生体育科の担任、授業時間は20時間を超え、男子卓球部の監督、寮監として充実した日々であった。当時の新鮮な出来事の全てが貴重な思い出になっている。体育教師として感うことなく、自信に満ち溢れていた。体育実技の各種種目は勿論のこと、殊に保健の授業は教科書に頼ることなく、独自に教授出来たことは大学時代の学びが存分に活かされた所以である。大学時代の4年間は過酷なノルマが課せられた実技実習で鍛えられ、専門教科科目においても中身の濃い講義を受けた。改めて学びの環境に恵まれていたことを痛感したものである。以来、38年に及ぶ高校勤務であったが、常に体育教師としての在り方を模索してきた。「体育教師らしからぬ体育教師」を目指したからである。関係する方々に先生の専門教科は？と問われたことは数限りないが、体育教師の回答を得たことは皆無だ。このことは私にとって、微かな誇りである。文無き武は「愚」であり、武無き文は「弱」である。この文武不岐・文武両道は水戸学の教えであり、安達学園の建学の精神でもある。知性に富み、内面に滾るような情熱を抱く体育人が求められるのだ。「体育教師らしからぬ・・・」との表現に誤解を招くことは承知の上だが、そこに問題点が秘められていることを知るからである。

一線を退いた現在、同じ道を歩む体育教師が日々研鑽に励み、学校教育に大きく貢献してくれることを期待したい。そして、これから体育教師としての夢を抱く在学生諸君に、少しでも寄与したいとの思いからこの体育教師論を作成した。

1、体育科教師を志した動機

①大学進学

小学校5年生から始めた卓球競技が全てである。中学校時代は県準優勝、高校進学も同僚と共に近隣の公立高校に進む。指導者もない部活動であったが、山形県高校学校総合体育大会（インターハイ）学校対抗準優勝を遂げた。進学先は当初、球友W君が志望した中京大学を考えていた。彼の一年先輩で後に世界チャンピオンになる小和田敏子が既に中京大学に進学していた。しかし、願書提出と期を同じくして県卓球協会理事長を通して新設「仙台大学」の紹介を受けた。しかも、卓球界では素

晴らしい実績を残してその名を知られている中田鉄士先生からの話しであった。高校選択を誤り実業高校に進んだ後悔もあり、初心に戻って大学生活に臨むにはゼロからスタートする大学こそ相応しいと心が躍り受験を決めた。

②仙台大学体育学部体育学科に入学

体育学部体育学科こそ自分を活かす道と心得た。運動能力は人並み程度であるが体力には自信があり、何よりもスポーツマン的性格を自負していた。従って、全ての教科・実技も意欲に満ち溢れていたキャンパスライフであった。2年間の教養科目も学年60人(2クラス)に満たない少人数教育故、徹底した濃い内容の講義であった。そして、実技科目は過酷な到達ラインが提示され、厳しい鍛錬が強いられた。一例を挙げると、1年次の陸上競技は全種目をこなした。100・110ハードル・200・400・800・1500・5000・10000m。最後は角田市往復20kmのハーフマラソンであった。リレー種目も400・800・1600m。更に、走り幅跳び・走り高跳び・棒高跳び・やり投げを始めとする投擲種目。このように手抜きが出来ない濃密なカリキュラムであった。二年次は器械体操、並行して各種球技・ダンス。シーズンスポーツは、夏が水泳・キャンプ、冬がスキー・スケート。全てが思い出に繋がり、正に血となり肉となった意義ある学習であった。

③個性・徳性・能力

数少ない能力が6年間励んできた卓球競技である。高校時代の顧問は全く名ばかりの教員で自己流を余儀なくされただけに、我が国の有名な指導者の下思う存分実力を高めたいと希望に燃えて入学した。しかし、入部者はゼロだった。中田鉄士教授の紹介で東北大学と東北学院大学の練習に加わり、個人戦のみ大会に参加した3年間であった。漸く4年次にチーム編成が可能となり2部リーグ優勝、1部昇格を果たして卒業を迎えた。高校時代の実力を高めること叶わず不完全燃焼に終わった競技生活であったが、当時全国レベルにあった宮城県立角田女子高校卓球部コーチを経験したことなどを思うと中身の濃い日々であった。

④教え子の記憶に残る教師を目指す

教師としての力量を図るために精進を重ねたと自負する。体育教師として恥ずかしくない知性と教養、率先垂範、常に生徒と共に歩む教師像を目指した。在校時代よりも卒業した先の長い人生の中で、かけがえのない思い出に残る教師である。体育は教育である。身体活動を通じた教育が「体育」である。熱く、情に濃く、温かい指導は、体育教師の真髄である。体育・スポーツを通して心の琴線に触れて確立される信頼関係、確固たる絆の形成は生徒の生涯を豊かにする原動力となる。

2、体育教師の実態と課題

①校務における位置

- ・生徒指導に拘ることなかれ

体育教師には生徒指導の校務担当が相応しいとされる傾向がある。一例をあげると対外的な活動の一つである各自治体の青少年育成市民会議である。参加する教員は生徒指導部担当教員が一般的だ。当然体育教師が主流となる。好ましい人選としての違和感はないし、適性にも恵まれていることは間違いない。しかし、体育教師としての本来の姿ではなく、極めて短絡的な選択と思わずにいられない。他律的指導に長けているから、覇気があるから、矢面に立つ強さがあるから等、学校管理運営に欠かせない心強い存在と考える。しかし、スクールポリス的な一面だけが浮き彫りにされては、真の体育教師像から逸脱していること甚だしい。

②求められる使命とは

- ・教師としての基礎基本を認識する

教科を超えた普遍的資質を満たす教師像を求めることである。一人ひとりの生徒に対して、教師としての責務を果たすことが第一義である。特に体育教師は一般教科科目と異なり、身体活動を通して教授する特殊性がある。心することは、トータルバランスである。ややもすると、自信過剰から生ずる品性に欠けた言動に陥り易い一面がある。内面から滲み出てくるような、ほとぼしる情熱があればいいのだ。常に品性を保ち、理性に富む生活姿勢から生ずる冷静な指導が求められるのだ。このような体育教師は、文字通り文武両道の模範的教師となり得るのだ。

- ・知性の高揚（1）読書の意義を認識する

模範的教師の必須条件は知性である。知性があれば、品性も伴う。教師の最大の魅力は「学ぶこと」がそのまま教師としての力量を高めることに直結することだ。即ち学ぶことが職務内容に直結する、極めて恵まれた立場にある。知性を高める基本は、先ずは読書である。幅広いジャンルに及ぶ読書から得られる学びの成果は計り知れない。

- ・知性の高揚（2）事務的能力（文章作成、表現能力）

教師の力量を示す、大きな要因の一つが文章作成能力である。一朝一夕では到達不可能で、地道な努力の積み重ねがあって初めて体得出来る能力だ。残念ながら、体育教師が不得手とする領域ではないだろうか。極論を唱えるなら、体育教師の評価がこの文章作成能力及び表現能力によって左右されている。教師としての資質に不可欠な事務的能力に欠ける体育教師は意外にも多いのが現実である。

③体育教師に求められる課題

- ・単純且つ浅はかな指導の改善

生徒指導の基本は、生徒理解に尽きる。洞察力が求められる。洞察とは、物事の本質を見抜くことである。生徒の心や考えなどに寄り添い、真実を見落とさないことだ。内面に秘められた悩みや苦しみに温かくアプローチして、共感を得ることが生徒理解には不可欠だ。体育教師が陥り易いのは、淡白な先入観である。表面的な事象にとらわれて判断してしまうことが多い。慎重な言動が求められるし、常に細心の注意を払って然るべきである。「・・・だろう」との甘い予測ではなく、「・・・かもしれない」との奥深い対応が必要なのだ。

- ・ボキャブラリー（語彙）、説論が可能な教師の力量

共感を得るためには、物事の本質を説かなければならない。生徒の心情を理解するためには、同じ目線での話し合いは欠かせない。そして、受け入れる生徒のレベルに応じた説明には、分かりやすい話術（テクニック）がポイントになる。まして問題行動に際しての説論、その意義は教師の資質が問われる重要な教育技術の一つである。豊富な言葉の知識、適切な事例の引用、TPO（時、場所、状況・背景等）を考慮した説論は分かりやすく伝わり、生徒の心を開示させる大きな力となり得る。日常の地道な研修により体得されるボキャブラリーの豊富さは、教師の力量そのものである。

- ・体育人としての特性を活かす人間力

スポーツマン的な性格は爽やかで明るく、屈託なく、人間関係を構築する模範的なタイプとされる。但し、総合的な人間力が土台とならなければならない。教育に関する内容は複雑多岐にわたり、その指導態勢も多様である。生徒一人ひとりの個性・特性・能力を尊重して、適切な指導を展開するには広く深い洞察力が求められる。体育教師の特性を最大限に活かしつつも、偏らず拘りの少ない中庸に富む人間力を基本とする。

3、学校運営に果たす役割

①学校秩序の確立

- ・規律指導の先頭に立つ資質

生徒指導は「他律的指導」に始まるのが基本である。秩序なき社会はあり得ないし、学校もまたミニ社会である。守らなければならない社会生活上の決まりが秩序であり、他律を意味する。そして、人格の発達課題でもある自律が芽生えて、人間としての自立・独立が成就する。学校全体の秩序を図ることは、生徒個人の健全な学校生活を確立する。規律指導の意義がここにある。体育教師はその最前線に立つに相応しい資質に恵まれている。強い責任感と使命感、率先垂範を常とする行動力がその原動力であり、体育・スポーツで育まれた資質が発揮されるからだ

②学校の活性化に貢献する

- ・各種行事への積極的取組み

学校生活の中心は授業であるが、生徒一人ひとりの個性を活かす場面を創りだすのが学校行事である。知育、徳育、体育の三位一体の教育目的を満たすには欠かせない。体育教師は各種学校行事を促進する主役に相応しい。特に体育・スポーツの世界で体得した実践力は組織の中で大きな役割を果たす。生徒と共に歩み、全教職員をまとめるリーダーシップに富むからだ。

- ・部活動の意義

体育教師には必ず特技とする専門種目がある。更に、体育学部で学んだ豊富な実技種目体験からオールラウンド、どんな技術指導でもまんべんなくこなすことが可能だ。トップを目指すチームから初心者にいたるチームまで技術レベルは多様であるが、部活動の意義は学校生活の主流にもなる魅力に富んでいる。全国各地から有能な指導者に魅かれて入学する生徒の存在はその典型的なケースである。一事を貫くことの尊さ、師弟の絆がもたらす筆舌に尽くし難い濃厚な競技生活は、生涯に亘る教育実践に他ならない。輝かしい実績は当事者の歓びであることは言うまでもないが、教職員はもとより同じ学校に学ぶ生徒の誇りであり宝となる。その歓びは在校時代に留まらず卒業後の思い出にも繋がり、母校愛の高揚になるのだ。活発な部活動の振興は学校の活力、活性化につながる。そしてその意義は、実に大きく、深く、尊い。

4、体育教師の責務

①授業の重視

- ・体育実技、授業内容の創意・工夫

範を示す率先垂範が全てである。生徒と共に動き、共に汗を流す快感を共有出来る身体活動が体育実技である。授業時間内では個人差がある運動能力に関係なく、一人ひとりの生徒の出番を演出することが求められる。従って常に生徒全員に目を配り、教師自らが生徒の中に溶け込む授業内容を心掛けることだ。高年齢の教師に見られがちな指示中心の授業は、生徒のモチベーションを低下させる最悪の内容だ。又、運動能力に劣る所謂「体育嫌い」の生徒は少なくない。しかし、授業内容の創意工夫により授業への適応は可能である。一例を挙げるならば、グループ集団をつくり、お互いに補助しあう雰囲気醸成する。あるいは、生徒同士で教えあう場面を設ける、クラス全体で取り組む内容等、指導案作成内容は無限である。

- ・保健

教科書はあくまでも単元内容である。カリキュラムを厳守しながらも、深く掘り下げた知性に富む教授内容にしなければならない。特にこの「保健」は、健康問題を中心として、社会問題を提起する極めて重要な内容に満ちている。問題意識を育み、高い関心と呼び起こす責務がある。留意することは画一的な教科書本位の授業展開に

偏ることなく、積極的な教材研究に努めその成果を活かすことである。具体的には、広く且つ深く掘り下げた授業内容により、健全な心身の発達が幸福な人生を支える基礎基本になることが可能となる。研修を積み重ねる日々が教師としての知性を高める。その知性は生きた教材となり生徒の心を動かす。雑学を交えても構わない、生徒の関心・興味を引く授業を展開することだ。一方的な講義よりも、双方向の授業展開が活気に満ちた学びの場となる。

・ 始終業の規律指導（挨拶・礼儀）

時代が代ろうとも人間としての礼節その尊さは永久不変であり、授業の始終業の挨拶は不可欠である。特に大切なことは、礼儀挨拶の意義を体得させることだ。しかし、現場教育でどこまで徹底されているか疑問で寧ろ形骸化している。教師にとって肝腎なことは、この授業に対して真剣に臨む覚悟を示し、同様に生徒は学ぶ立場に相応しい謙虚さを示す場であることだ。始終業の挨拶礼儀は、必然的にその意義を学ぶことが可能となる貴重な時間である。「礼に始まり、礼に終わる」武道の精神は貴重な教えであり、日常生活の基本的な躰教育にも通じる大きな意義をもつ。挨拶が形骸化している最大の原因は、教師がその意義を真剣に指導していないからである。現に、生徒は形式的な挨拶に終始する。私は必ず次のように行い、挨拶礼儀の真髓を体得させてきた。先ず教師は生徒の正しい心のこもった挨拶を確認する。その後、生徒に真剣に返礼する。生徒も教師の真摯な姿に感動し学ぶことであろう。お互いに真剣な挨拶・礼儀を共有する意義ある時間となる。次の通りである。

< 始業時 >

① 起立

椅子席の右側に起立する。机列の乱れを正す。当然一列になることを確認する。

② 礼

生徒全員が揃ってしっかり45度位の礼をすることを確認する。出来るまでやり直しを命じる。そして、生徒が起立している状態で、教師は深々と真剣に礼を返す。教師の挨拶礼が終わってお互いに静態、着席の指示を待つ。

③ 着席

指示によって生徒は静かに着席して、授業に備える

< 終業時 >

① 起立

指示に従い席の横に立ち静態、教師と向かい合う

② 礼

生徒は授業に感謝の意を込めて挨拶の礼をする。教師は全員の挨拶の礼を確認してから己の授業を省みて真剣に挨拶を返す。向かい合って静態。

③ 着席

指示によって生徒は静かに着席する。教師は退室するが、暫しその場に残り生徒の質問等に備えることが求められる。

※始業の挨拶は言うまでもなく授業の「けじめ」である。一日6限の授業と仮定したなら、12回の起立・礼・着席のけじめをつけることになる。週に60回、月5週とすれば300回、大変な数になる。正しい挨拶礼儀の習慣は、社会生活への適応力を高める。

5、体育教師の心得

①品格ある体育教師

・品性

明朗快活な人間性は、体育教師の生命線である。しかし、その言動には状況に応じた冷静な判断が求められる。人間としての理性である。理性から生ずる品性は、知性によって高められる。そして知性は教養に他ならない。学びの道を究めるこの理性・知性・教養が体育教師に求められる。

・知性（教養）

情操教育、芸術、音楽等の文化レベルの高さ、グローバルな観点からの世界観、政治、経済に関する知識の修得などが知性の証しであろう。一般的に保健体育教科の特性からか、不得手とされるこれらの領域は教師の基礎基本だ。教師の立場があって初めて教科担当がある。生徒は他教科と共に同じ目線で体育教師を評価する。体育面のみ突出した教師は、生徒から信頼されないことが多い。生徒の目は極めてシビアであり、求める教師像ではないのだ。教師としての資質が土台であり、その上に体育教師の立場があることを認識しなければならない。

・服装

運動着は体育教師の制服だが、学校現場における様々な場面においては全て一様ではない。飽くまでも体育関連授業時の運動着であり、それ以外は教師として相応しい服装を心掛けることだ。通勤時や帰宅時などの運動着着用は非常識と心得たい。教師としてのモラルであり、けじめでもあるからだ。

②人間味に富む体育教師の強み

・道徳観に富む

体育は、身体活動を通して得られる教育である。スポーツの精神は心身の健全性にある。確固たる目的達成に向けて努力する日々の鍛錬は、かけがえのない価値がある。その過程に芽生えるチームメイトや競技者同士の共感、指導者との信頼関係その絆は正に生きた教育そのものである。純粋な心が醸成され、好ましい人格形成が図られ、社会人としての倫理観や道徳観が育まれる。体育教師の真骨頂がここにある。授業や部活動を通して、直に接することによって学ぶ意義は他教科にない強み

である。

- ・強い責任感と使命感と使命

体育・スポーツ活動の特色に、個人の甘えや我儘が許されない厳しい節制がある。個人の責任が求められ、チーム全体への貢献も不可欠だ。部活動の指導者として、授業における教師としての責務と使命感は、体育教師の誇り得る資質である。

終わりに

- ・私が求めた体育教師像

教師生活を終えた今、改めて「体育教師」としての立場を考えることが多い。中学・高校を含めて、体育教師の置かれた立場、存在意義はどこにあるのか、又どのような位置に置かれているのかである。何故なら教師としての質的レベルに疑問を抱くことが多かったからである。疎んじられていると思わずにいられない口惜しさは少なくない。その都度「自分は違う、体育教師としての誇りを抱いている」と思いながらも、意識の低いそれらの教師を知るだけに納得せざるを得ない自分がいた。その原因を探ったのが今回の内容である。意識の低さは学びの不足であり、人間的資質の低さ、即ち品性の欠如だ。逆にその資質が高ければ高い程、素晴らしい教師の模範となり得るのだ。在職中に非常に多くの対外研修会に恵まれた。県教委保健体育研究会は専門だが、その他の小学校、中学校、高校それぞれに存在する生指研（生徒指導研究会）、教相研（教育相談研究会）、そして管理職対象の教頭研修会、校長研修会があった。これらの研究会（研修会）には、公立・私立学校の境がなく、同じ立場で接することが出来た貴重な会議であった。故に、各教科から選出されたメンバーの中で、体育教師としての評価を計る良い機会であった。残念ながら、その評価は芳しくないのが現状である。私が「体育教師らしからぬ体育教師」を目指したのはこのような背景があったからである。「先生は体育の先生に見えないですね」と言われたことで、不快になったことはない。寧ろ得も言われぬ満足感に浸ったし、これこそ望んでいる体育教師像だと自己満足していた。何故ならば、他教科教師に劣る評価が教育現場に蔓延しているからだ。僻みとは思いたくないが、一般社会でも同様の気配を感じる。スポーツマン的性格で指導力、行動力、挨拶礼儀も素晴らしい、しかしその評価の低さは何が原因なのか。それは教師としての品性と、研修意欲、即ち学びに対する向上心の欠如ではないか。スポーツの特技を秘め、常に学び続ける姿勢を失わない教師、品格ある人間性を誇る教師こそ真の体育教師だ。

- ・体育教師を志す後輩に、先輩としての期待

母校仙台大学第1期卒業生としての使命を何よりも大切にして、他大学出身の教員には絶対に負けたくないと決意して歩んできた。その結果は満足する47年間の教員生活であったと自負する。しかし、体育教師の立場には、最後まで素直に受け止めることが叶わなかったことを寂しく思う。「ああ体育ですか？」と蔑まれた経験が数

限りないからだ。優秀な管理職も多く一概に論ずることは不謹慎この上ないが、悲しいかな一般的に体育教師のステータスは高いと言えない。体育教師だけの狭い世界では知り得ないかもしれないが、豊富な教育現場を経験したから冷静に検証することが可能なのだ。学校運営の要として校務に精通し、事務能力に長け、文武に秀でた教師が模範的な体育教師と唱えたい。生徒にとっても、人生の同伴者となり、教え子の生涯に関わる師となるに相応しい教師こそ真の体育教師である。母校仙台大学体育学部の教えは、堅実な教育理念に基づいている。これからの教育界を担う体育教師となるべく後輩諸君に期待してこの拙文をまとめた次第である。